

## 平成 30 年度 自己評価

### テーマ 「よく見て、よく考えて、なんでもする子」

#### 0・1才の目標・ねらい

- 野外で過ごすことを楽しむ
- 気候の変化や季節の移り変わりをを感じる
- 運動機能の発達を促す

#### ふりかえり

・優しくゆったり接し個々に合った対応とスキンシップを取り、保育者を身近に感じられるようにしたことで、子ども自身が主体として受け止められ大切にされていると感じ、人への信頼関係が生まれるようにした。

その中で規則正しい生活を保育者や友だちと一緒に送り、食事・睡眠・排泄などの基本的な生活習慣が身につくようにした。意欲が持てるように子どもの様子を見ながら進めていくようにしたが、取り組み方が個々に違うので焦らず次年度も見守っていきたい。

・遊びの中で物の名前を知らせることで、子ども自身が真似て言ってみようとする。優しく話しかけたり、絵本などを見る機会を持つことで発語を促すようにした。喃語・単語・一語文の成長が見られ保育者や友だちとも簡単な言葉のやり取りが出来るようになった。子ども自身が気持ちや欲求を表せるようになったが、子どもの思いを先に読んでしまい返事をしてしまう、ということもありゆっくり対応すべきだったと反省することもあった。

・公園にも出かけ、広いグラウンドを走ったり、坂道や階段の昇り降りをすることで運動機能の発達を促すようにした。外で過ごすことが「気持ちいい」と感じ、開放的な気分の中、情緒の安定を図るようにもした。

・生活に落ち着きが見られると室内だけではなく外へと生活する場所を増やすと共に、そこで見るもの、触るものをどんどん増やすようにした。初めて見る、触るものも多く保育者の関わり方も重要であり小さい子どもなりの気づきを十分に受け止めるようにした。

暖かい・寒いなどを体で感じられる機会を持ち、同時に保育者の言葉がけ、表情で子どもに伝えるようにすることで感受性を養うようにもした。次年度も子どもの経験を増やすことでより多くの気づきを体験してほしい。

## 2・3才の目標・ねらい

- 環境の変化に気づき、興味や関心を持つ
- 体力の増進を図る

### ふりかえり

・興味を持つことがどんどん増え、探索活動が園内外でも見られるようになる。目にする物、触れるものが「これ何？」の連続であり、それに対して保育者はゆっくり対応することで子ども自身が納得できるようにした。疑問を感じたり保育者が知らせることで視野の広がりを促すようにし興味、関心が持てるようにした。

活動する内容、場所が同じであっても感じることは違うことがある。子どもの気づきも多くあり、それを受け止め思いを共有することが大切である。それと同時に子ども自身で気づく言葉がけを意識し、色んなことに注意がいくように意識した。

・かたつむりやバッタの昆虫探し、菜園を利用した野菜作りで様子を観察したり生長を喜ぶ経験し、物に対する優しさ、思いやる心と生命の尊さに気づけるようにした。物事に対しての探求心が芽生えてきたので、その思いがより深まるように年齢に合った取り組みを考えていきたい。

・身の回りのことを自分でしようとする気持ちが強くなってきたが、時には援助が必要であった。保育者は子ども自身がしようとする気持ちを優先し受け止めゆったりと対応することで「できた」という満足感が持てるようにした。時間がかかったり個々の取り組みも違うので、様子を見ながら進めるようにすることで基本的な生活習慣が身につく、自信にも繋がるようにした。家庭での様子も聞きながら今後も取り組み自立を目指したい。

・友だちや保育者と言葉のやり取りが増えたことで言葉が豊かになり、自分の思いや気持ちを表し思いが伝わる楽しさが感じられるようにした。落ち着いた環境づくりをすることで情緒が安定し、増々会話を楽しむ姿が見られ、友だちや保育者とのつながりも深くなるようにした。

・野外で過ごすことで開放的になり、遊びの中で全身運動も行い体力づくりをした。歩く機会を多く持つことで持久力が養えるようにしたり公園の斜面、階段の昇り降りにも取り組み運動機能が高まるようにした。側で見守り、応援することで子ども自身の意欲、達成感にも繋がるようにしたい。

#### 4・5才の目標・ねらい

- 自発的に活動しようとする
- 状況に適応できるようになる
- 身体的バランス能力を育む

#### ふりかえり

・色々な遊びを経験することで、自ら「やってみよう」という気持ちになり活動を積極的に取り組むようになる。したいことを自発的にやり、保育者は援助したり時には見守ることでその行動を引き伸ばすようにした。友だちを誘って一緒に活動する姿も見られ、遊びの中で疑問に感じることもあり、「なぜ？」を子どもたち同士で考え、それについて調べたり、保育者に尋ねることで思考力が高まり、学びに繋がるようにした。子どもたちで遊びを考えられるようになってくると、遊びが単調にならないように、必要な物を用意したり、すぐに使える場所に置くことで子どもたち自身が遊びを展開させ、十分に楽しめられるようにした。

自発的な行動は個人差が見られるがその思いを暖かく見守り、援助と見守りのバランスを適度に保つことが大切であると感じ、今後も課題である。

・繰り返し行うことや新しいことを経験すると取り組みには色々な方法があることが理解できるようになった。保育者や友だちの様子を見て対応することがあったが徐々にその時々状況に応じて行動できることも増え、毎回同じ方法でなくても良いことを話し子どもの行動にもしっかり評価するようになった。

・体を十分に動かせる環境を整えることで存分に体を動かし持久力、瞬発力だけではなく身体的バランスを養うようにもした。運動用具の使い方を習得すると、使いこなせるようになり、子どもの可能性を十分に引き伸ばす取り組みもした。バランス感覚は運動器具だけではなくリズム遊びなども取り入れることにより感覚をつかめるようにもし、イメージがしやすいように保育者がリズムを取りながら進めていくなど、個々にあった取り組みもした。

・異年齢児との関わりの中では、小さい友だちと接することで思いやりの心を育てると共に頼りにされているという責任感を持って行動できるようにした。その思いや行動を認めることで自己肯定感が持てるようにした。

友だちと一緒に様々な経験をすることでつながりができ集団で行動することも増え、その中で友だちの思いに気付くだけでなく相手の立場になって考えられるようにした。子ども自身が自分の思いを優先してしまう場面があるとまず話を十分に聞き、その後相手の立場を自分の立場に置き換えることで理解できるようにした。

生活の中で相手を思いやる心を育て、ルールを守る大切さをその都度知らせるようにし、社会性の基礎を作るようにした。